書評

# 福田敏浩著『第三の道の経済思想』

晃洋書房
2011年、vii+221p

酒井泰弘
Yasuhiro Sakai
滋賀大学／名誉教授

「世界失速――崖っぷちの欧州、袋小路の米国、円高に翻弄される日本、インフレ過熱の中国」。2011年10月1日号の週刊誌『ダイヤモンド』の表題である。普段は経済問題にそれほど関心を寄せない家内ですら、この刺激的なタイトルを何度も眺めて、「これ本当の話なの？日本も世界も失速状態なのね」と溜息をついていた。筆者はプロの経済学者として溜息などついている暇は毛頭ない。「心身が病気になれば医者が必要とされるように、経済が病気になれば経済学者が必要とされるだろう」と勝手に解釈している。

本書『第三の道の経済思想』は、かかる「危機の時代の羅針盤」として誠にタイムリーな学術書である。著者の福田敏浩教授は、かねてより比較経済体制論の権威であり、昨年まで滋賀大学の同僚として非常に親しくお付き合いをさせていただいた。福田教授はドイツ語文献に精通した碩学であり、筆者自身も同教授から、ゾンバルトやヴェーバー等の高説について貴重な御教示を頂いたことは記憶に新しい。同教授の最新作は「第三の道論」の集大成であり、学界に反響を巻き起こし、貴重な「羅針盤」の役割を演じることは間違いのない所である。

本書の取り扱う内容は、量的にも質的にも広く深いものがある。まず類書自体が比較的少ない分野であるにとどまらず、ここあそこに著者独自の視点や考え方、さらに将来への発展方向について積極的な見解が開陳されている。そこで、評者としても通常の書評スタイルの枠を少し超えて、本書の独自性が浮かび上がるような工夫をしたい。そのために、幾つかの設問を最初に行い、それに対して福田教授が本書の中でどのように応答しているかを順次吟味したいと思う。

第1の設問は端的に、「第三の道とはそもそも何なのだろうか」ということである。通俗的な解釈によれば、「第三の道」(the third way)という言葉が脚光を浴びたのは、1990年代、欧米諸国の中道左派政党のスローガンのせいである。思えば、1980年代はアメリカのレーガン大統領やイギリスのサッチャー首相を始めとして、市場原理主義に基づく保守主義が世界に跋扈した時代であった。ところが、1997年5月に、18年振りに労働党政権の樹立に成功したイギリスのブレア首相は、幾つかの有力紙に「第三の道とは」というタイトルの論説を寄稿し、いわゆる新政権の経済思想を宣伝し始めた。その学術決定版が、ロンドン大学・ギデンズ教授の著書『第三の道』であり、その中で「旧式の社会民主主義と新自由主義という二つの道を超える道」が、ブレア政権が志向すべき方向性であると結論づけられた。

学界においては不幸にも、ブレア＝ギデンズ流の第三の道論が幅を利かせすぎているようだ。福田教授は一人敢然として、かかる些か歪んだ趨勢を正し、第三の道論のもっと深く広い本来の姿を復活させようと試みる。本書によれば、第三の道論は、はるか両大戦間、1940年代後半、1960年

代および1990年代に、さながら波状的に興隆と衰退を繰り返してきた。その多様な学説の中から14人の学者、より正確にはドイツ新自由主義系から3人（オイケン、レプケ、ミュラーアルマック）、ドイツ社会主義系から3人（オッペンハイマー、リッチェル、ハイマン）、マルクス主義系から4人（シク、ホルヴァート、ローマー、ユンカー）、体制的収斂論系から1人（ティンバーゲン）、そしてグッド・ソサイエティ論系から3人（リップマン、ギデンズ、エツィオーニ）が順次取り上げられ、周到な比較分析が行われている。

今日では、ドイツ語圏の学説に触れる機会が少ないだけに、ドイツの新自由主義系や社会主義系の第三の道論の全体像を知ることは、それだけでも大変な文献的価値があるだろう。ましてや、福田教授が単なる整理展望作業を遥かに超えて、著者自身の立ち位置を明確にし、独自の「経済体系のダイナミックス論」の構築作業に着手しようとするのは、その意図たるや誠に気宇壮大であると言うべきであろう。

さて、第二のあるべき設問は、「経済・国家・社会三者間の関係はどのように把握すべきだろうか」という点である。従来の比較体制論は概して、「経済か国家か」という二元的パラダイムに依拠してきた。市場経済の役割最大化を目指すのが「第一の道」、国家政策の役割最大化を図るのが「第二の道」であり、そのいずれでもない混在型経済体制を模索するのが「第三の道」である。福田教授はかかる二次元パラダイム論に満足することなく、「今や経済・国家・社会の三次元パラダイムに基礎を置く経済社会体制論に脱皮すべきであると考えている」（本書73ページ）。著者の新パラダイム論の背後にあるのは、ポラニーのいう「市場経済の社会への埋め戻し(reembeddness)」の思想であり、オイケン、レプケおよびミュラーアルマックに共通する「政策ないし法による市場経済の囲い込み」の考え方である。

福田教授が鋭く指摘するように、自由放任は決して安定的でなく、むしろ不自由と集中化をもたらす、という「レッセ・フェールのパラドックス」が存在する。ここに、「市場は競争、社会は連帯」というような「経済ヒューマニズム」の存在価値があるのだ。実際、市場経済の暴走とバブルを食い止めるのは、社会成員間の信頼・連帯および宗教倫理などの「非経済的なファクター」であろう。かの近江商人の「三方良し」の考え方も、そのような社会連帯主義に通じるものを有している。

第三の設問は、「人間とはそもそも何であろうか」という根本問題である。「両極端は相通じる」という言葉がある。第一の道と第二の道は一見両極端の考え方であるかのようであるが、双方ともに人間を「金銭一辺倒の経済人」と単純化する点で同根の思想である。第一の道論によれば、生産者は利潤極大化、消費者は効用極大化にひたすら励む。第二の道論によれば、資本家による労働者の搾取を阻止するために最大の国家干渉も止むを得ない。第三の道論の立場は多様であるが、その最も有力な考え方の基礎には、人間とは本来「ゆたかさ、ゆとり、やすらぎを求める生活者」であるはずだ、という高次の人生観が横たわっている。追求すべき第三の道とは、第一と第二の単なる中間の道ではなく、両者をともに高く超える「高次元の道」であろう。

さて、福田教授は最後の第9章において、野心的な「経済体制ダイナミクス論」を試論的に展開している。これは換言すれば、著者流の「第三の道を描き出すというストーリーである」（191ページ）。その中核には「何が経済体制を変動させるのか」という駆動力の問題がある。ここでも出発点となる考え方は、「市場の自己貫徹」対「社会の自己防衛」

という、ポラニー流の二項対抗運動である。その上に、経済体制を精神、秩序および技術から成る意味統一体（sinnvolle Einheit）と捉えるゾンバルト流の経済思想が加わる。著者の考え方によれば、もしも所有制度、需給調整制度および国家干渉制度という三つの基幹的制度の組み合わせが「調和性基準」を満たすならば経済体制は安定するが、そうでない場合には体制は不安定化し、やがて変動が避けられないであろう。残念ながら、著者自身も認めるとおり、「調和性基準」の中身がそれほど特定化されておらず、「目の粗い試論の粋を出るものではない」（191ページ）かもしれないが、評者の目には「著者の志の高さ」には頭が下がる思いで一杯である。

21世紀初頭はリスクと混迷の時代である。なにしろ「資本主義の失敗」（ポスナー）とか、「資本主義は、なぜ自壊したのか」（中谷巌氏）という名の書物がベストセラーとなる御時世である。社会経済は危ないし、経済学自体も非常に危ない。福田教授の新著が、危機の時代を脱出する「導きの赤い糸」となるだろうことを衷心より期待している。